

言語文化教育研究会 2007 年度前期

連続パネルセッション

日本語教育における実践研究とは何か—理論と実践を結ぶ試み

第7回「実践研究のプロセスにおける諸問題」

西村学さん（文化外国語専門学校）

日時・会場：5月25日（金）18:00-20:00 早稲田奉仕園6Fフォークトルーム

<議事録>

1. 趣旨
2. 質疑応答
3. 連絡

1. 趣旨

現場の教師の間では教師に与えられた担当項目をいかにこなすかという How to を追求することを重視しがちである。しかしそれだけでは、教室活動の目的と自分の教室活動の実態を照らし合わせ、自分の教室活動がいったいどのような成果を生み出しているのかということが判断できなくなってしまうだろう。問題を感じた場合、なんとなく何かを変えたり、他の人がやっていることを単にまねたりするだけでは不十分で、何を問題だと捉えるか、問題を解決していくための方法として何が適切かを見抜く力がなければ改善にはつながらない。そのような力を養いながら改善の質を上げていくというプロセスを経ていかないと、実践研究にはなっていないだろう。

ここでは、さまざまな取り組みを見て、議論することから、何を問題点としてあげるべきか、その問題点を解決するためにはどのような手段が必要なのかといったことを的確につかむスキルが育っていくプロセスについて日本語学校の事例を報告する。

2. 質疑応答

【主体性とは何か①】

参加者 N：実践研究の定義「教師が主体的に教育の場をデザインし実際の授業で起こっていることを具体的な教室データによって検討することによって次の実践へとつないでいくプロセス（市嶋 2007）」における、「主体的に教育の場をデザインし」とは？主体的でなく教育の場をデザインすることがあるか？

発表者：自ら問題点を見つけ改善するためにオリジナリティのある具体策を実践することが主体的ということ。主体的でないのは、誰かの作ったマニュアルに単に実践従うこと。この両者が日ごろ混在しうる。

【教師の社会的立場】【ティームティーチング①】

参加者 M：スケジュールを組む教師A、ある授業を計画する教師B、授業を担当する教師B・C・Dの関係は対等でなく、立場によっては主体的になりにくい。今回はどの立場の人が発表にあったような改善的試みをしたのか？

発表者：B・C・Dの人も意見がいえる状況にあった。何か目的を共有できれば、アプローチの面では主体的になれる。意識の持ちよう。

参加者 M：ティームティーチングはやりにくい。一人の方がやりやすい。

発表者：その通りだが、ティームティーチングによって多くの視点を取り込むことができる。一人だと、忙しさにかまけてマニュアルに頼ってしまうが、議論によって改善していくことこそが実践。

参加者 M：対等にものをいえない状況は必ずある。雇用の問題も。

発表者：どこでもパワーの違いはある。

参加者 O：私のところでは、一人の教員が任されて授業を持つが、一人ではやりにくい。マニュアルはないが、How to 重視になり、どう導入すればどう定着するかに意識が向かう。何を教えるのかはあまり考えられていない現状。

【成果の裏づけ】

参加者：結局今回の発表にあった実践をしたのは立場の優位な教師Aか、誰か？工夫に成果があったとしたのは、学習者の振り返りからか？最初の問題提起にどう答えているか？

発表者：印象という域を出ない。しかし、今まで到達目標でさえ明白ではなかった。学習者の意見によって授業が変わった、活気がでたという成果はある。データが弱いので再度の実践が必要。

参加者：到達目標と成果の比較は大切。また、今回のクラスと次のクラスは違うので、どのくらい反映されるのか？

発表者：少なくとも参加型にしたい気持ちで授業を実践し、参加してもらえたようになった実感がある。

【制約の中での実践】

参加者：例えば教科書もかえることができるか。制約の中でどの程度変えられるのか。担当者の目的と制約の問題がある。

発表者：教科書は使わざるをえない。が、今回のクラスで教科書使用をやめることはできた。しかし、その教科書にあった教材もあったので、それを使いたい気持ちはあった。授業終了の段階で学習者にできるようになって欲しいことを教員同士で話し合った。大きい目標の議論はできた。学生も変わるので、ニーズを追うことに限界がある。ただ、教師がこれをしたいというものを前に出すことは大切。教師の好き嫌いを押し付けることにもなるかもしれないが。

【主体性とは何か②】

参加者 T：上司と部下がいたら誰が主体か。教師が目指す方向があることが主体的なのか。到達目標は何だったのか。日本語の自然な読みとは何か。参加型にしたかったのか？メタレベルの問題を浮き上がらせることで到達目標が出てくるのでは？自分の目指す方向に向かうことが主体的なのでは？

発表者：今回の実践でメタが上がった。自分の考えの整理の仕方として、話す場を持たないと見えてこないと感じた。

参加者：自分が授業を変えるとき、一人の学生に対しての実態はあっても、一人ひとり全員を見たら必ずしも良いとはいえず、振り出しに戻る。

発表者：ぐるぐる回っているようでも、どの方向に行くのかという問題はある。

参加者：ぐるぐる回っていく。考えがぼやけたり、固まったりして。

発表者：考えることによってビリーフが色濃くなっていけばいいのではないか。まだはつきり見えてないが、目指していくことを探すこと自体が大切。

参加者：主体的でないと、むなしくなってくる。自分の存在意義。

発表者：そうかもしれない。わからない。

【日本語能力試験対策は？】

参加者：上級レベルのクラスで、日本語能力試験対策はどれくらい意識されているか。

発表者：要素はある。対策してはいるが、そこまで意識は強くない。文法の問題集を後期から使っている。以前は、するなという上司がいて、合格率が悪かったが、最近では扱っている。試験対策というより、教師が自分の目指す方向にもっていく意識の方が強い。

参加者：今の試験には Can Do リストがある。この級ならば、これができるというもの。学習者が企業にいったときにこれが乖離してはいけないので、授業で取り扱った方がよい？

発表者：試験は一部を測るもので、偏りもある。あまり固執したくないのが私自身の考え。

【実践とは何か①】

参加者：今回の実践の見直しはしている。新しいこと、何か+ α しなくていけないわけではないのでは。繰り返し試みることも大切。時代も違うし、学生も違う。繰り返しによってデータが積み重なりメタが上ることもある。必ずしも+ α をしなくてはいけないわけではない。

参加者：教員の好き嫌いで授業をしてもいいのでは？問題は方向に固執して変えようとしていないこと。やりたいことも変わる可能性があるという立場が大切。

発表者：おっしゃるとおり。自分の言葉を代言してくれた。目指すことが明確になれば、同じことをしていてももっと見えてくるものがある。常に何か新しいことをという意識で自分の目指すものが転々とするのもよくない。

【主体性とは何か③】

参加者：同じことを繰り返せるのか？繰り返せない。学習者の主体をどう考えるのか。教師の主体がある教室活動での学習者の主体を考慮した振り返りはあったか。

発表者：あまり考えずに生きていた。学習者が主体的である授業を教師が主体的に考える、作り上げるということだ。

参加者：どういうことがあると学習者が主体的だといえるのか。

発表者：例えば、今回の発表で絵を描くこと。そのなかで、学習者同士の絵が違って、「お前よく読め」といったやりとりがあった。そこに主体的な何かがあるような気がする。A=Aを教えるよりも主体的。

参加者：教師の主体が減ると学習者の主体が減るという関係ではない。学習者が「これがいい！やだ！」を示すのが主体的。教師が主体性を示すことで学習者も主体的に反応できる。

参加者：その通り。教科書を使うことそのものも主体性を阻害している。教師が「これがいい」という思いを伝える方が大切。

参加者：主体性がよくわからない。授業全体の目的は？大学に入らなければならない？参加型というのはあくまで方法論にすぎない。教科書で何を教えているのか？何を教えるのかの議論が必要。

【実践とは何か②】【主体性とは何か④】

発表者：何がいい方法だというわけではない。ある一定の手段だけだと飽きるので、違うやり方もしてみたというのが今回の実践。大学入学、能力試験のためにこまかく説明することも良いやりかた。

参加者：今までより実践されたことはいい。飽きないということより、引き出すものが何かという視点があった？

参加者：試すことで実態が変わって充実した。

参加者：何を教えているかは機関によって違う。大学入学、能力試験一級といった目的によって方法があるが、学習者の興味を主体性と捉えている。参加型がいいのは何かしたいと何も学べないことが分かるから。一斉授業だと、学んでいるような気持ちになっているだけかもしれない。それが主体性だと思う。

参加者：教科書があってもそれぞれの立場で対等に扱うことができる。自他の意見の差異を対話でぶつけあうことによって教師と学習者の主体が発揮されるのでは？

発表者：まだそのような授業をしたことがないので、可能かどうか分からない。ひとつの壁を打ち破る方法かもしれない。やってみたい。もう少し回りの人間との議論が必要。

参加者：別に細川先生が実践している総合についていったわけではない。教科書があっても、対等な主体性のある授業はできるのではということ。

参加者：日本語教師としてではなく、国語教育において、たけのこについて、クラスで意見を出し合った。その教室にしない教科書ができ、対等な実践だった。

参加者：対等ということは簡単。しかし学習者の意識において対等になりえない。どうしたらいいのか、アンケートをとっても、先生に対してよいことばかりを書く。どう本音を引き出すのか。

参加者：何か少しでも分かったことを実践して、またアンケートをとる繰り返しが大切。

参加者：そうすると、設計者は教師のまま。全てをみせていくことが必要。

参加者：それも踏まえアンケートをとる。

参加者：んんん

【実践とは何か③】

参加者：実践、なぜ振り返りが必要なのか。何が良かったのかよりもどうしてよかったのか、どうして問題が起こったのかを振り返り、次につなげることが実践研究ではないか。

発表者：もっと明確なビジョンに近づける方向が大切。目指していることをもっと明確化することで次のステップになる。

参加者：どのように成功と失敗を定義するか。2回めの実践が成功する理由はどのように得るのか？

発表者：ルーティーンで感覚だけでいいな、悪いなということが今まで問題だった。

参加者：何を持って成功といえるのかどうか。

参加者：繰り返えしによって、ある程度の質は保てる。結局は教師のやりたいことをやることが大切。

参加者：多くの学習者に会えば、それだけバリエーションが増える。その中で自分の目標を照らし合わせながら考えていける。

発表者：自分の良かった悪かった、成功失敗になることがよいのではないと思った。

参加者：うまくいかなかったということよりも、データで検討してみせていくことが大切。
学生の反応をみていく。このために教室データが大切。主体的とは目指すべき方向性を捉えているということであり、例えば、参加型がどうしていいのかを考えることで到達目標も出てくる。一人の好き嫌いもいいが、何人かですり合わせることも大切。

【ティームティーチング②】

参加者：ティームで担当することの意義は？

発表者：一人よりも、二人の方が視点が增える。授業をつくる視点、学習者を見る視点。
責任を分散することで、より一人ひとりが主体的にかかわれるという側面もある。

3. 連絡

— 【新刊】 —

『考えるための日本語・実践編

—総合活動型コミュニケーション能力育成のために—』

明石書店 2,200円＋税

いよいよ総合活動型日本語教育の全貌が、実践編の形をとってその姿を現す。

「実践研究」とは何かをめざす、新しい日本語教育の世界を手にとってみませんか。

— 【受講者大募集中】 <日本語教育ユビキタス講座：夏の4講座開講> —

充実の4講座（いずれも1万円：海外からの送金手数料無料）

1. 研究計画書の考え方と方法（4週間）
2. 言語文化教育入門—ことばとコミュニケーション—（4週間）
3. 総合活動型日本語教育フォーラム（4週間）
4. 実践研究プラットフォーム（3ヶ月間）

受講者各位と、メンターおよび講義担当の細川英雄とが集う顔合わせ会※に始まり、インターネット上での対話を通じて考えを深化させるプログラム（※顔合わせ会は7月28日（土）14:00～東京早稲田にて開催（ご参加任意））。

世界中どこからでも受講できる。本物の対話から始まる研究がいまここに。

以上 書記：五十嵐